

Preview

村岡貴美男 展 エニグマの肖像

暗示の美学

日本画家・村岡貴美男の、百貨店では初の個展が開催される。

展覧会名のサブタイトルにある「エニグマ」とは、第二次大戦中にナチスが使用した暗号装置の名前でもあり、一般的には「謎」という意味を持つ。村岡は今回この言葉に、「謎めいた人の肖像」、あるいは「謎という形の無い抽象的な概念の具現化(肖像化)」という二つの意味を持たせ、絵の中に託している。現代美術ではよくある、ダブルミーニング的な考え方から付けたという。

長いこと女性をモチーフにしている村岡だが、女性の官能性とか、容姿の美しさを再現することを目的としていない。あくまでも女性はメタファーであり、その姿を通して、予感や記憶、あるいは空気が気配といった、明快なフォルムを伴わないものを暗示する。

聖母マリアを起源に、西洋美術史では古えから今日まで、女性を重要なモチーフとして発展させてきた。その意味では、村岡の絵画は西洋的な文脈を汲むのだが、その情緒性を考えると、日本的な美意識に裏打ちされた世界観でもある。こういった、一つの絵が孕む両義性(アンヴァレント)は、村岡作品の特徴であり、魅力の核となっている。たとえば徹底して学んだ古典技術をベースにししながら、一方ではとらわれない精神で樹脂や金属、木材等多用し、オブジェ的な作品にも挑戦もする。それゆえ、古美術の著



「思案」15号P



「金」SHI-MI 85.5x100.0cm



「香りの風景」38.5x73.0cm

名なコレクターの目にも留まるが、オークションでは現代美術の枠にカテゴライズされたりもする。このように、物質としての強さとテーマ性を備えた作品は近頃では稀有であるが、真のコンテンポラリーアートとは、このようなものだろう。同時に、日本美術本来の主流である「金のエニグマ」と「銀のエニグマ」を見てみよう。



「光の風景」30.0x59.5cm



「銀」SHI-MI 85.5x100.0cm



自ら切り出したという板材に寒冷紗を貼り、定着の強化を図った上で描画が施された画面。板材と岩絵具とがしっかりと結合して、長い時間を宿したかのような深々とした風合いが生まれている。「金」と「銀」との対照は、太陽と月のイメージをしぜんと喚起する。「金」の背景に描かれるエンジェルトランペットはその名の通り天使が吹くトランペットを思わせる。天使がトランペットを吹く時



「月の位相」6号P



「メタモルフォーゼ」5号M

とは、キリスト教では黙示録にある最後の審判を象徴する。しかし一方でこの花は、聖なるイメージとは裏腹に有毒成分も含むのだという。村岡ならではの両義性が、ここにも隠し味のごとく秘められている。「銀」の女性の背景に繁茂する蓮の葉は、周知のとおり仏教的なイメージを喚起する。泥に根を張りながら水面上に美しい花を咲かせる蓮は、その存在自体が世の両義性を主張する。以心伝心の意を伝える「粘華微笑」という禪語も、この絵を見ていると想起される。女性の光背のごとく描かれる植物、陰影を孕んだ色の調子、寡黙な女性像……。瞑想的な静寂を宿した画面は、一種仏画的である。と同時に、クリムトの絵に見られる抑えのきいた華やぎや世紀末的な香りも漂い、ここでも西洋と東洋との不思議な融合が見て取れる。

見る人に謎を問いかける村岡作品は、それだけでは完結しない。鑑賞者の想像力との交感を経るなかで、十人十色の物語を生み出すのである。

(編集部)



むらおか・きみお
1966年京都府生まれ。2000年東京藝大大学院博士後課程修了。05・10年院展・日本美術院賞／大観賞。14年同人推荐。現在日本美術院同人。